京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **40** (2021), 111–118

瞿靄堂、勁松（著）《藏語衛藏方言研究》
北京：中国藏學出版社、2017 年、711pp.

鈴木博之

1　本書の構成

本書は、中国チベット自治区で話されるチベット系諸言語のうち、ユー・ツァン[1]〈衛藏[2]〉方言[3]についての記述研究である。筆頭著者は、1950 年代以来チベット自治区を中心とし、その周辺地域も含め現地調査に携わり、また、本書で取り扱うすべての方言を共同調査者を伴って現地調査をしている。その調査結果の中で、ユー・ツァン地域の言語資料をまとめたものが本書といえる。

本書は３章と付録に分かれる。第１章はチベット族の言語とチベット語方言を手際よく紹介した導入部である。中国国内で一般的な立場に立って、方言分類が紹介されているが、その主たる考えは瞿靄堂 (1996) などに見られる[4]。第２章では、ユー・ツァン方言５地点（〈前藏〉〈後藏〉〈阿里〉〈夏爾巴〉〈巴松〉）の記述を行っている。第３章では、仲介性方言として２地点（〈改則〉〈那曲〉）の記述を行っている。付録は、以上の７地点の語形式を、漢語見出し・チベット文語形式を伴って記した語彙集となっており、計 1664 個の見出し語がある。動詞には語形変化も記してある。付録だけで本書のほぼ半分のページを占めている。

以上に述べたように、本書の半分は語彙資料であり、７地点の言語の簡便な記述はほぼ独立しているため、各地点の言語特徴を調べるには至便である。ただし、事項索引もなく、語彙の配列にも案内がないため、まずは本書を通読し、その記述の構造に慣れる必要があるなどの問題点がある。「研究」と標題にあるが、「現地調査に基づくデータ整理と資料の提示」としての役割が濃い作品であると評者は判断する。

---

[1]「ユー」を「ウ」と書くものもある。たとえば、岩尾・池田編 (2021) など。

[2]本稿では、原文の漢語の名称・用語を引用するとき、地の文との混同を避けるため、〈 〉でくくって示す。

[3]「ユー・ツァン方言」が成立するか否かは、何をもって「言語」または「方言」と呼ぶかによって見方が異なる。詳細は第２節で述べる。

[4]この方言分類の見方については、日本語では西 (1986) がさらに広い文脈で紹介している。

2　本書の対象言語に関する検討

本書に類する先行研究には、金鵬 (1958) がある。本書の付録を除くと、金鵬 (1958) の記述と本書は非常によく似ている。金鵬 (1958) ではチベット自治区を代表する地点の変種であるラサ方言、シガツェ方言、チャムド方言を記述していて、前者２種がユー・ツァン方言、最後の１つがカム方言に分類される（瞿靄堂、金效静 1981；瞿靄堂 1996）。本書はカム方言は扱わないとしているものの、カム方言に分類される〈改則〉〈那曲〉の記述も取り扱い、さらに〈夏爾巴〉〈巴松〉という２種も記述対象とする。なお、〈阿里〉（𪗋爾方言）と〈改則〉の記述については、瞿靄堂、譚克讓 (1983) という別個の出版物にも掲載されている。

「ユー・ツァン方言研究」と銘打つ本書の内容については、まず「言語とは何か」という根源的な問題を提起することが避けられない。また、方言研究におけるいくつかの問題についても議論する必要がある。

2.1　言語と方言の枠組みに関する検討

当然のことであるが、本書で取り上げる言語はすべてチベット語の方言であるという前提で記述が進んでいる。ところが、〈巴松話〉については、チベット語の方言ではないという見解があり（Tournadre 2003, Wang 2021, Tournadre & Suzuki 2021）、評者もこれに賛同する。

本書の筆頭著者は、瞿靄堂等 (1989) において〈巴松話〉がユー・ツァン方言の１つであると報告し、本書でもそれを踏襲している。〈巴松話〉の節においては、確かにその変種がユー・ツァン方言の１つであるかどうかを検証しながら記述を進めている。その中で、著者はチベット系諸言語における非同源語を的確に指摘しているが、そうであっても、〈巴松話〉をユー・ツァン方言の中の独立した下位方言であると結論している。

この見解の異なりは、同源語や音対応に基づく比較研究の方法論自体に起因する問題と言える。どちらの見解をとるかは、読者にゆだねるべき問題であり、本書評では見解の相違が存在することを指摘するにとどめる。

2.2　方言研究の枠組みに関する検討

仲介性方言という表現は、方言研究の枠組みにおいてなじみのあるものではない。その原語〈中介性土語〉というのも、決して広く使われる用語ではない。そもそも〈中介〉とは、日本語「仲介」と同じく、たとえば A と B の橋渡し役を担う第三者 C または C の橋渡し行為についていう。ところが、本書の記述（pp. 248-252）に従

うと、A が B の特徴を兼ね備えた状態を〈中介性〉と呼んでいるように理解できる。このように見ると、〈中介性土語〉とは A の地域変種にほかならず、決して特別な存在ではない。そして、第３章で記述される２つの方言は「カム方言に属する」と明言しているため（pp. 252, 310）、なおさら〈中介性〉と呼ぶのは適切でない。

以上のことから、本書はユー・ツァン方言の記述研究ではなく、チベット自治区の中で、カムに属さない地域、すなわち昌都市以外[5]で話されるチベット語（および非チベット語１種）の記述を包括的に扱っている、と位置づけるのが正確である。

読者のために、Tournadre (2014) や Tournadre & Suzuki (2021) の観点を参照しつつ述べると、いわゆるユー・ツァン方言はチベット系諸言語の「中央区（central section）」にあたり、それには少なくとも以下の８種が含まれる。

- ユー（dBus）
- ツァン（gTsang）
- ペンボ（’Phan-po）
- トゥ（sTod）牧民方言群
- 東トゥ（sTod）農民方言群
- 西トゥ（sTod）農民方言群
- コンボ（Kong-po）
- ロカ（lHo-kha）

以下に本書の記述する地点の詳細と Tournadre & Suzuki (2021) の分類を対比する。

本書の記述	方言地点	Tournadre & Suzuki (2021) の分類
〈前藏〉	ラサ	中央グループ・ユー方言群
〈後藏〉	シガツェ	中央グループ・ツァン方言群
〈阿里〉	噶爾	中央グループ・西トゥ農民方言群
〈夏爾巴〉	立新	南西グループ
〈巴松〉	錯高	非チベット諸語
〈改則〉	改則	南東グループ・玉樹方言群
〈那曲〉	那曲	南東グループ・ホル方言群

本書の７種について見ると、〈前藏〉がユー、〈後藏〉がツァン、〈阿里〉（噶爾方言）が西トゥに相当するが、それ以外の〈夏爾巴〉〈巴松〉〈改則〉〈那曲〉は、Tournadre & Suzuki (2021) によれば中央グループですらない。

Tournadre & Suzuki (2021) の立場に立てば、「ユー・ツァン方言研究」と題する研究は、以上の８グループについての異同を明らかにする研究であってほしいところである。この視点から考えると、本書の記述は余計な変種の記述が含まれているほか、ほしい情報に言及がなく、その構成面については落胆を隠せない。

[5]そもそもチベットの伝統的地理区分であるユー・ツァンとカムを分割する線が現在の行政区分と必ずしも一致するわけではないため、このように単純に分割できるわけではない。

3　各方言の記述に関する検討

本書で記述される７地点の言語については、その記述の枠組みが共通している。このため、いったん記述方針に慣れれば、対照するのも容易である。また、ほとんどの例語・例文にはチベット文語形式が添えてある点は注目に値する。共時的な記述研究であっても、方言研究の立場から見ると、チベット文語形式との対照は必要不可欠である（Häsler 1999；邵明園 2018；鈴木 2020 など）。本書は、各口語と文語形式の対応関係を明示的にまとめる代わりに、例に文語形式を添えるという方針をとっている。読者は、与えられた形式を頼りに、各自の興味・目的に基づいて音対応を整理することができる。

ただし、本書が与える文語形式が常に正しいとは限らず、例外を見つけたときにはチベット語辞典や他の研究書にあたって確認する作業も必要である。たとえば、〈阿里土語〉（噶爾方言）の ntuʔ[12] という形式に文語形式 *gda'* を当てているが（p. 185）、Tournadre & Suzuki (2021) によると、この口語形式に対応する文語形式はないが、阿里からネパール、ブータンに分布するチベット系諸言語に、同源語を見出すことができる。また、〈那曲話〉の存在動詞（p. 338）の uʔ[31] に対する文語形式に *yod* を当てているが、*'od* という表記が文語で用いられる[6]。

各言語の記述の構成は、音声（音韻）、語彙、文法の３節立てで、その順序や記述内容は７種の変種についてほとんど共通である。ただし、〈夏爾巴〉（立新方言）については、記述の分量がやや少なめで、文法項目もラサ方言との対比も含むため、さらに記述が少ないが、名詞化接辞、動詞のアスペクト、格標識などの要点は押さえてあると言える。

音声・音韻については、７種の変種について、統一した方針で記述されている。７種とも声調言語であり、すべて５度制の調値で高さを示す、中国の言語学で広く受け入れられている方法が採用されている[7]。このように、１つの著作として統一された方法で記述を提供するのは、その内容を利用する側にとっては使いやすく、一定の資料的価値を見出すことができる[8]。特に、中国で出版された研究成果、たとえば、瞿靄堂 (1991)、格桑居冕、格桑央京 (2002)、江荻 (2002) などの方言研究とは相性がよく、表記を調整することなく対比できると言える。

一方で、チベット系諸言語の声調、また超分節音素に対する見方に複数の立場が

[6]ほかにも、「来る」の文語形式には *yong* と *'ong* があるなど、*y* と *'* の初頭子音の対応関係が認められる。

[7]ただし、その良し悪しは議論となるところである。朱曉農 (2010)、Suzuki (2016) などを参照。

[8]一方で、Sun (ed.) (2014) のような著作は、各章の著者がそれぞれの音韻分析の立場と表記法に基づいて記述しているため、総合的に見ると複雑で利用しづらい。

あることもまた事実である。それは分節音についても同様で、音体系 1 つ取ってみても分析方法はさまざまあり、たとえば〈前藏〉で記述されるラサ方言は、チベット系諸言語の中で最もよく研究されている変種であるが、母音体系の解釈は分岐が激しい（Gong 2020）ことに注意しておきたい。

形態統語についても、著者は人称による動詞形態の異なりを記述しているが（pp. 52, 112, 174-175, 240-241, 290-293, 338 など）、証拠性に基づく枠組みで記述する立場があり（Tournadre & Sangda Dorje 2003; Oisel 2017; Suzuki et al. 2021）、そのほうが言語体系として現実的である（鈴木 2020）。また、本書の文法項目における動詞について、たとえば Oisel (2017) や Tournadre & Suzuki (2021) などが TAM(E)（時制・アスペクト・モダリティ（・証拠性））の複合形式として記述する範疇[9]をアスペクト〈体〉として記述している点にも注意が必要である（pp. 54-55, 118-130, 179-189, 215-218, 242-245, 288-299, 340-353）[10]。

そのほか、本書の記述そのものに誤りがあることもある。たとえば、〈改則話〉の存在動詞の記述（p. 287）において、「２・３人称の存在動詞は da^{31} (*gda'*) で、（それは）ラサ方言で jøʔ^{12} (*yod*) である」旨の記述があるが、ラサ方言の記述（p. 52）では、「２・３人称（の存在動詞）は、tuʔ^{12} (*'dug*) と reʔ^{12} (*red*)」と述べているから、ここに本書内部での齟齬が認められる[11]。

本書の意義を簡潔に指摘するならば、「統一した記述方針に基づく方言研究」と言うことができる。ここでいう記述方針とは、表記法と記述の枠組みを含む。もちろん、異なる言語体系を統一した記述方針を前提に記述する向きには批判もあるだろう。ただし、先に述べたように、言語のさまざまな側面が研究者によって異なる立場・術語・表記で記述されている。複数の資料を扱う研究において、各変種の記述方針、ひいては術語が異なっていれば、その調整に大きな労力を要する。それが研究上の障壁にさえなることがある（Suzuki et al. 2021）。

本書を利用すれば、以上の点においてまったく問題なく資料を取り扱うことができる。また、中国で出版された資料（黄布凡主編 1992 など）と並行して利用することも容易となる。この立場からみると、特に付録の語彙集は、７種の変種について

[9]Zeisler (2004) は、この範疇を「相対時制」として取り扱うなど、アプローチにはさまざまある。

[10]一方で、この複合形式の中から、アスペクトに関わる部分に焦点を当てて記述することも可能である（周洋、鈴木博之 2020）。その場合には、本書で扱われない経験を表すアスペクトなども記述に含める必要がある。本書で扱う変種の中では、アスペクトに７～８種のカテゴリーがあると記述されるが、何を記述の対象とするかでカテゴリー数は変わるため、数量の比較は意味をなさない。

[11]上述の通り、チベット系諸言語の存在動詞を「人称」というカテゴリーで記述することは不合理であるから、ここに引用した語句もまた読者による解釈を加えて理解しなければならない。

記述されるデータを直接対比できる点が評価できる。表記のゆれと記述の枠組みの異なりは、二次資料を扱う研究で注意を払わなければならない問題である。本書に含まれる７種については、ほぼ同一の方針で記述されているため、本書の記述をそのまま資料とし、それに基づいてさらに詳細な比較研究を行ううえで、記述の調整をすることなく利用できることになり、有益であると言える。

4　まとめ

本書の取り組む記述研究のもたらす成果については、その価値を疑うことはない。ただし、中国のチベット語に対する見方を考慮したとしても、本書をユー・ツァン方言の研究書と見るには首肯しがたい点がある。また、言語現象の分析に用いられる枠組みも、「中国式」である点は否めない。一方、これまでに知られていなかった言語・方言にアクセスできるようになったことは、当該分野の研究に大いに役立つものである。

参考文献

岩尾一史・池田巧 (2021)『チベットの歴史と社会』（上下）臨川書店.

鈴木博之 (2020) [書評]「海老原志穂（著）『アムド・チベット語文法』東京：ひつじ書房、2019 年、xxiv+374pp.」『言語記述論集』12, 71-80. URI: http://id.nii.ac.jp/1422/00003697/

西義郎 (1986)「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11.4, 837-900+1 地図. doi: https://doi.org/10.15021/00004359

Gong, Xun (2020) How many vowels are there in Lhasa Tibetan? *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 43.2, 225-254. doi: https://doi.org/10.1075/ltba.19004.gon

Häsler, Katrin Louise (1999) *A grammar of the Tibetan Dege (Sde dge) dialect*. München: Selbstverlag.

Oisel, Guillaume (2017) Re-evaluation of the evidential system of Lhasa Tibetan and its atypical functions. *Himalayan Linguistics* 16.2, 90-128. doi: https://doi.org/10.5070/H916229119

Sun, Jackson T.-S. (ed.) (2014) *Phonological prof les of little-studied Tibetic varieties*. Taipei: Academia Sinica.

Suzuki, Hiroyuki (2016) In defense of prepalatal non-fricative sounds and symbols: Towards the Tibetan dialectology. *Researches in Asian Languages* 10, 99-125. URI: http://id.nii.ac.jp/1085/00002195/

Suzuki, Hiroyuki, Sonam Wangmo & Tsering Samdrup (2021) A contrastive approach to the evidential system in Tibetic languages: Examining five varieties from Khams and Amdo. *Gengo Kenkyu* 159, 69-101. doi: https://doi.org/10.11435/gengo.159.0_69

Tournadre, Nicolas (2014) The Tibetic languages and their classification. In: Thomas Owen-Smith & Nathan W. Hill (eds.) *Trans-Himalayan linguistics: Historical and descriptive linguistics of the Himalayan area*, 105-129. Berlin: Walter de Gruyter.

Tournadre, Nicolas & Sangda Dorje (2003) *Manuel de tibétain standard : langue et civilisation*. Deuxième édition. Paris: L'Asiathèque.

Tournadre, Nicolas & Hiroyuki Suzuki (2021) *The Tibetic languages: An introduction to the family of languages derived from Old Tibetan* (with the collaboration of Xavier Becker and Alain Brucelle for the cartography). Paris: LACITO Publications (CNRS).

Wang, Sanchuan (2021) L'évidentialité en bake. Unpublished manuscript presented at Evidentiality and Modality: At the crossroads of grammar and lexicon (poster; Montpellier/online).

Zeisler, Bettina (2004) *Relative Tense and aspectual values in Tibetan languages: A comparative study*. Berlin: Mouton de Gruyter.

黄布凡主編 (1992)《藏緬語族語言詞匯》中央民族學院出版社.

江荻 (2002)《藏語語音史研究》民族出版社.

金鵬 (1958)《藏語拉薩日喀則昌都話的比較研究》科学出版社.

格桑居冕 [sKal-bzang 'Gyur-med]、格桑央京 [sKal-bzang dByangs-can] (2002)《藏語方言概論》民族出版社.

瞿靄堂 (1991)《藏語韻母研究》青海民族出版社.

瞿靄堂 (1996)《藏族的語言和文字》中国藏學出版社.

瞿靄堂、金效静 (1981)〈藏語方言的研究方法〉《西南民族學院學報》第３期 76-84.

瞿靄堂、譚克讓 (1983)《阿里藏語》北京：中国社會科學出版社.

瞿靄堂、共確加措 [dKon-mchog rGya-mtsho]、覚嘎 [lCo-lnga] (1989) 〈衛藏方言的新土語：記最近發現的巴松話〉《民族語文》第３期 39-61.

邵明園 (2018)《河西走廊瀕危藏語東納話研究》中山大學出版社.

周洋、鈴木博之 (2020)〈水磨房話體範疇的混合特徵〉《民族語文》第 4 期 43-56. URI: http://www.mzyw.net.cn/Magazine/Show?id=75666

朱曉農 (2010)《語音學》商務印書館.

受領日　2021年10月2日
受理日　2021年11月13日